

がら狂つてゐる怒濤をみると、私は身震ひするほどはげしい恐れと懐かしさを感じるのであつた。そして私の心は刻一刻に迫つて来る絶望の豫期に充たされてはゐたのだが、それであるて矢張り何處かにお雪が生きて存へてゐることを暗示する理由が潜んでゐるやうに思へて、悲壯な心持にはなりながら私は見るもの聞くものに對していろ／＼な疑問を挿んだ。そしてそのためにお雪自身よりも、彼女を取圍んでゐる周囲の事實に多く耳を傾けるやうになつた。

一週間目にはもう人々は死んだものときめてしまつて、その噂も次第次第に薄らいて来た。それと同時に警察でも手段に盡きて、今に死體が発見されるだらう位なこと捜索を放棄してしまつた。

併し日が経つに従つて妙に暗くなつて来たのは野村家の空気があつた。誰れもお雪と云ふ名を口にはしなかつたが、互に瞻める眼の底には常に異様な不安が漲つてゐた。お兼はお雪に代つて毎日毎日私の食事を運んで来たが、一緒に食膳についても以前のやうに賑やかに笑ひ興ずることはなかつた。主人も大方は黙り勝ちで、夜は殊に寂しかつた。そして私は離れ座敷へたつたひとりて寝るのがひどく恐くなつたので、晩だけ母家の方へ寢間を移してもらつたが、

その隣りは久どんの寝る部屋で、私は二晩もつゞけて妙な唸き聲を聞いた。彼も餘程お雪の妄執には苦しめられてゐたやうで、晝間もひどく口が少なくなつて、始終眼を落として鬱ぎこんでゐた。

その騒ぎの最中に東京の母から餘り滞在が長びくから一旦歸京しろといふ手紙を受取つた。私も野村家へ對しては自分の感情から漸次と氣拙い關係が出来てゆくやうに思つてゐたさなかだつたので、それをい、機會に、丁度お雪が失踪してから十日目の午後、私はいよ／＼支度を整へて、悲しい思ひ出に充たされた磯濱の町を去ることにした。

主人や、久どんや、加賀屋の女將に送られて、仲で祝町を通ほる時、私はお雪に別れた晩のことを鮮かに思ひ浮べて、名状することの出来ない感懐に惱まされた。悲しいと云ふよりも寧ろ一種悲壯な心地が胸の底に溢れて来た。

船場からは主人とたつたふたり水戸通ひの小さな蒸汽船に乗つて、那珂川を溯ほつた。低い兩岸にはいつか秋の色に染められた蘆荻が風に亂れて、薄濁りのした水の面にも何とも云へぬ寂しさが白く流れてゐた。主人も私も殆んど言葉を交はさなかつた。

水戸ではお園さんにも逢つて、再びその懐かしい言葉を聞くことが出来た。お園さんは先日
の事件もけろりと忘れてしまつたやうな風で、頻りにお雪の失踪のことを憐んで、私をもてな
す態度は私が初めて磯濱へ来た時と少しも違はなかつた。津崎の消息はまるで聞かなかつた。
夕餐は野村家の隠居處で御馳走になつて、公園なども見物させて貰つた後、愈々水戸の停車
場を立つたのはもう日が落ちてから餘程後のことであつた。汽車が動き出すと、

「ちや御機嫌よう。又是非來年被來つて下さいよ。お待ち申して居りますからね。」と、お園さ
んは人懐こい聲で云ひながら、主人の後からつゝと走り出て来て、車窓にかけた私の手をそつ
と握つた。私は親身なものに別れてゆくやうな名残惜しさを覺えて、その姿がみえなくなるま
でじつと見送つてゐた。

列車は眞暗な關東平野を南へ南へ駛つてゆく。車窓のそこには烟突から吐き出される火の粉
が雲のやうな煙と一緒に渦巻きながら流れて、紅く濕んだ村落の灯は後へ後へと足早にとんで
ゆく。漸次と心が静まつてくるに従つて、私の心には今迄毎日毎日搜索やら杞憂やらで抑へつ
けられて忘れかけてゐたさまざまの思ひ出が走馬燈のやうにひとつ／＼展開して來た。そして

最後に、蒼白い月光に照らし出された砂丘を今見るやうに鮮かに思ひ出すと、肩を落してしく
しく泣いたお雪の姿がその前へ夢のやうに朦朧と浮び上つて來て、寂しい死灰色の砂丘を背
景にすべての悲哀が濃い夜の闇のごとく悚々として喘いで來た。私は彼女の短い一生を思ひ、
虚無から現れて虚無へ歸る流星のやうな私との逢遇を思ひ、人生の底に流れてゐる無限の寂寞
をひたと直視したが、しまひには到頭耐らなくなつて、強く唇を噛みしめながら耐力もなく
歎息した。そして騒々しい轍の音に紛れて、嗚咽してゐるやうな、訴へるやうな、お雪の聲が
陰々として響いて來るのをきくと、私はぞつととして、五體には痛いほど鳥肌だつた。……

その翌年の冬であつた。

私は靖國神社の祭りの夜、たつた一人て人込みに揉まれながら廣い境内をぶら／＼歩いてゐ
た。肌を刺すやうな寒い寒い北風は容赦もなく砂塵を吹きあげて、兩側に並んだ見世もの小屋
や露店のなか、らは樂隊の聲や、人の喧囂が騒々しく聞えてゐた。私はとある見世もの、前へ
立止つて何氣なくぼんやり看板繪をみてゐると、その時私の眼の前を二人の女が通り過ぎた。

一人は五十格好の汚い老婆で今一人は背の低い東髪に結つた肉附きのよくない若い女だつた。アセチリン瓦斯の灼熱した光はその顔をくつきりと照らし出したが、その刹那若い方の女はちらりと私の顔をみて妙に眼を敬てた。私は別に注意もせず、その儘やりすごしてしまつたが、暫らくするとふとその女のことゝが氣になり出した。どうしても何處かで一度逢つた顔だと思ふと、その咄嗟、私の心の底で、

「お雪だ。お雪だ」と鋭く叫ぶ聲が聞えた。と、私は物に憑かれたやうにびくりとして忽ち我にもなく彼等の紛れ去つた人込みのなかへ分け入つた。

泣き度いやうな切ない氣持ちで十二時過ぎまで彼方此方と隈なく探して歩いたけれども、到頭私は二度その女に逢ふことが出来なかつた。そして人氣の薄くなつてゆく境内から眞暗な路を寒い風に追はれながら家の方へ歸つてゆく時、私の心は名状すべからざる悲しみに充たされて、暫らくの間心象の表面から遠ざかつてゐた砂丘の幻影を又再び新しく思ひかへしたのであつた。——それからもう十年近い年月を経過した今日に至つても私はまだあの可憐なお雪と、蒼白い月光に照らされた砂丘とを、すつかり忘れてしまふことが出来ないのである。

船 客

正午に樺太の大泊港を出帆した敦賀丸は、暮れかゝる夜とともにひたすら航程を急いで、漸次と宗谷海峡の方へ近づいてゆく。銀灰色の密雲に閉ざされてゐた空は限りもなく蒼茫とかきくれて、それでなくてさへ日脚の短い北方の海上のこととて、大洋の面から一面に湧き上つてくる黒燻石のやうな濃い夜の闇は忽ちにして右舷にのびた雪斑な樺太の岬端を押し包んでしまつた。そして稚内の沖合に差し懸らうとする頃から俄に舷を打つ波浪の響が高くなつて、船體は氣味の悪いほどゆるやかに動搖しはじめ、それと同時に骨を刺すやうな寒風が吹き添つていつともなく粉雪がさらさらと落として來た。

下甲板の食堂はその頃が一番賑やかだつた。滑らかな曲線を描いたニス塗りの天井には數多い電燈が花笠のなか、ら明るい光を投げて、白布に掩はれた食卓の周圍には二十四五人の船客が彼方でも此方でも口健めに談笑しながら食事をとつてゐる。フォークや、ナイフを使ふ音

や、皿の觸れ合ふ音などがごちやごちやに入れ混じつて、調理室へ通ふ通路には白の制服を着た給仕が皿を持つたり、酒壺を持つたりしながら忙はしげに出入してゐる。そして室内の空気がステイムの温氣に蒸されて、調理室の方から流れて来る強い葱の匂ひと一緒に重く澱んでゐる。

樺太の豊原の支廳長の一行は左舷寄りの食卓に集まつて、饗詰めの正宗を汲み交はしながら食事をやつてゐた。樺太といふその名が示すやうに、この航路の船客は他と自ら類を異にしてゐるなかに、この一行は又殊更人目を惹くやうな不思議な集團をなしてゐた。烏のやうな鋭い眼眸をした瘦軀の支廳長は鬚だらけな顎を厚いロングコートの襟に埋めて、舷窓を背にしなから氣むづかしさうに坐つてゐた。その右傍には公用で樺太へ渡つた小樽警察の署長がゐて、左傍には少し離れて支廳の屬吏の清田が貧血性な蒼膨れのした横顔をみせながら俯向き加減に腰を落して座を占めてゐた。そしてその向ふ側には視察歸りの松村代議士が、御用商人の服部と船の事務長との間に挟まれながら厚毛の背廣の胸を披けて寛々と坐つてゐた。

食事はもう一時間も前から續いてゐる。最後に座に加はつた松村代議士の頬にももう充分酔

が紅く燃えて、時々まるまると肥え太つた手で少し禿げ上つた額口の邊を撫てながら頻りに座談の中心を作つてゐる。そしていつまでも酒を愛するといふ風に幾つとなく盃の數を重ねてゐるが、やがて三皿目の料理を食べをはると今度は息苦しさうに鼻を鳴らしながら首に喰ひ込んでゐるカラーのボタンをはづして、急に口調を改めながら、

「すると、今度の内地ゆきの御用向きは何ですな。」

「いや、別に用向きと云ふのではないのですが……」と、支廳長は不器用な手つきで小鳥の骨を選び分けながら、「實は私は神経痛の痼疾を持つとるもんですから、今度は暫らく暇を貰つて何處か暖い温泉へも行つて養生して來ようと思つとるんです。」

「は、あ。そりや結構です。樺太のやうな土地ぢやさうした御病氣にや宜しくないてせうなあ。それに良い醫者も居らんでせう、……」と、又盃を口へ持つて行きながら、「併しさうやつて自由に温泉療法などがお出來になるんだから結構です。」

「いや、平常でしたらとてもこんな贅澤は出來んのですが、今年には幸ひ經費の都合で大體の事業が越年前に形づいてしまつたもんですから、此一箇月ばかりは至極暇で。それに札幌で馬匹

の入札もやらなくちやならんので到頭思ひきつて出て来ました。」と、衣囊から兩ぎりの安巻煙草を取り出して、節太な木製パイプにさして、神經的にすばく燻らしながら云つた。そして偷むやうな眼眸で代議士の顔をみながら口だけで笑つて、「いや、どうも併し、我々俗吏の生涯ほど詰らんものはありませんなあ。貴方がたと違つて、任地のほかには世界がないのですからなあ。何をしてもあゝす可し、かうす可しで。はは、。」と、傍の署長を顧みながら取つて附けたやうな皮肉な調子でつけ加へた。

「そりや誰しも同じこととせう。私達だつて選挙區民へ精々頭を下げて、借金を殖やした結果が吝臭い歳費位のもので體を縛られることになるんですからなあ。それにこの頃のやうに政黨の内部で仲間割れがはじめちや危くつて耐らんです。先づ城郭を構へる前に紙幣束で地固めをしてかゝらなくちやならんのですからなあ。」と、腹を押し出して潤達さうに聲高く笑つた。その度に大きな金縁の眼鏡が鼻梁の上をずり落ちて来た。

詰まらなさうな顔をして手酌でちびくやつてゐた御用商人の服部は頻りにナツブキンで口を拭ひながら考へてゐたが、やがて代議士の肩越しに事務長と石炭の話をはじめた。夕張炭

と、樺太炭との優劣論から漸次と一噸一圓高とか、一圓二十錢高とかいふやうな専門的な話しに落ちて行つた。

屬吏の清田は殆んど談論の圏外へ突き出された形で、腕ぐみをしたまゝ、片手で鼻をせりながらぼんやり雙方の話に聞き入つた。

署長はやがてフライの皿を押しやると、たつぷり飲み食ひしたと云ふやうに伸びをしながらはじめて口をきつて、

「併し今度の御旅行ちや随分御参考になるやうなことも多う御座んしたらうなあ。北は何處邊までおいてになりましたか？」

「海馬島まで行きました。何にしろ交通が不便なんで、これにや酷く弱らせられましたよ。」

「さうで御座いませうとも。冬期の旅行は全く難儀ですからなあ。殊に越年すぎでしたらとも動けやしません。交通機關の設備が可けないの何のと新聞記者なんか喧しく云ひ立てますけど、御覽のとほりの氣候ちや叶ひませんや」と、署長は可笑しくもなさうに愛想笑ひをして、「何か御視察をなすつた上で御意見でもあれば是非拜聴したいものですが。」

「いや、大分忙がしい旅行だつたんで、これといふ纏まつた材料もありませんが、併し新領土だけに充分研究してみなければならぬ問題は澤山あると思ひましたな。」

「なるほど、貴方がたの御觀察から見れば無論さういふ問題がなくなちやならん筈ですが……」

「……」と、署長は稍や術學的な態度になりながら「遠い處といふ點もありませうが、一體内地人は樺太とか北海道とか云ふ問題に關しては甚だ冷淡ですからなあ。警察制度の如きもあんな遣りかたでは到底駄目だと思ひますが。」

「さやう、全く御説のとほりです。樺太といへば戦勝の結果が生んだ副産物のやうなものです。事實上日本とは切つても切れぬ利害關係を持つとるんですからなあ。これから開發のしやうに依つちやどんな富源になるかも知れんですよ。」と、代議士は更に盃を重ねながら談論の熱を得たといふやうに滔々と語を續けた。

「一體私の考へては、樺太に對する一般の根本政策が既に間違つてゐると思ひます。富源開發とか、移民獎勵とか机の上ちや立派な口をきいてゐるが、いざ實地に見聞して見ると政府の遣り口は一つとして當を得てゐるものはありやしません。第一漁業と農業とをまるて別な位置に

置いて考へてゐるやうぢや何が出来るもんですか。この二つが密接な姉妹關係をもつて發達して來るやうな方針を執らないうちは、經營の施設のと徒に騒ぎたてたところで到底ものになる氣遣ひはありやしない……」

「いや、それに就いちや私共も平常から多少意見を持つてゐるのですが、何といつても政府の方針が既に曖昧なんですから……」と、今迄黙つてゐた支廳長は煙草を置いて、眞顔で口を入れた。

「兎に角ですな。」代議士はそれを眼で抑へて「私はこの漁業と、農業とに對する政府の方針が全然主客顛倒してゐると思ふんです。政府は餘り漁業の方へ重きを置きすぎてゐるんだ。」

「成程。御尤もです。署長はいかにも勿體らしく肩を張りながら議論の筋道を了解しようとするやうに首を傾げる。

「實際もう少し金をかけて、農業の方面の富源を開くやうにせんけりやとても駄目です。山林でも、炭坑でも、それから一般の農事經營でも事實上小資本をもつて流れ込んで來た移民の手任してあるばかりで、政府の施設としては殆んど見るべきものがないんだから心細いぢや

ないですか。固より政府だつて無い袖は振れんのだから、已むを得んかも知れんけど、あれだけの土地を開拓して行かうといふのに小規模の民間事業から利用してか、らうと云ふその了簡が既に愚劣極まる。」と、手酌でなみ／＼と注ぎながら、彼は更に語を續けた。

「一體漁業者といふ奴は私に云はせると樺太に對して何等の利益をも與へない、いや、寧ろ時に依ると却つて弊害を與へるもんだと思ふんです。かう云へばひどく極端な議論のやうに見えますが、全く事實がそれを證明してゐる。彼奴等は自分達の巢を出る時に米から味噌、醬油のやうな食料品を全部船に積んでやつて来て、それを食べながら漁をして、金になる漁獲物はそのまま、又船に積んで持つて歸つてしまふ。さうして小樽なり、函館なりへ行つてそこで卸して市場へ出してしまふんだから直接旨い汁を吸ふのは皆内地の商人なんだ。樺太へ落ちる金と云つては全く漁場の附近にある達磨屋の收入位なものなんだから酷いぢやありませんか。」

「全くさうですな。それに反して農業の方と來たら土地そのものが産む金で當然樺太の血や肉になるのですからなあ。」支應長は稍生氣を帯びて云つた。

あ。『署長は何んと思つたか急に居坐ひをなほして、』なんでも沼を埋て、田畑にしていく方法なんかは實に巧妙なもんだとかいふ話で。……』

『さうですとも。日本人には兎に角實際的能力は充分備はつてゐるんです。灌漑の道をつけることはお手のもんだし、殊に畑を作る手際などに至つちや露西亞人なんかの遠く及ぶ處ぢやないんです。だからこの上政府で農村の經營を充分補助してやつて、どし／＼交通の便宜を開いてやりさへすりやいくらでも發達するんだ。山林はあの通りだし、石炭は豊富だしなあ、私は全くかうしてゐても齒痒くて耐らんのです。』と、言葉をきつて、四邊をひとわたり見まはしながら、更に變つた語調で、

『全く現状のまゝで捨て、置いたら樺太の將來はどうなるか分らんですよ。もう現に各府縣の移民團のなかにもひどく疲弊した奴が出来て、續々歸國する。まあ歸國の出来る奴はい、が、出来ないものになると實に悲惨を極めてゐますからなあ。生産物は上つても運びだして生活資力に代へる便宜はなし、それで冬期に入りや餓死するのを待つてゐなくちやならん始末ですからなあ。青森縣の移民團を見に行つた時なんぞは全く泣かされましたよ。飢饉よりもみじめな

慘狀を呈してゐましたからなあ。現に大泊てみてゐるとこの船にもさう云ふ所謂政府の施政方針の犠牲になつた手合がいくらも乗つてゐるんだ。」

「全く御説のとほりです。私共のやうに現在その土地に住んでゐるものは充分その缺點を承知してゐるのですが……」と、支廳長は又疼痛でも覺えるのか慘ましい顔容をしながらふと言葉をきつた。

署長は謹聴してゐるやうに首を傾けてはゐるが、その話が終ると急に欠伸を押し隠すやうに鼻の穴を大きく膨らしながら深い嘆息をついた。

「いや、この事に關しては眞岡で逢つた新聞記者團とも話してみたのですが、今期の議會では充分辯じてみるつもりです。内地へ歸つたら勿々材料を整理して、うんと政府委員に肉迫してくれませう。」と代議士はボーイが運んで來たビフテキにフオークをつけながら昂然と云ひ放つた。

その時、代議士の肩越しに事務長と服部との話は、大分熱して來た。話題はいつか露西亞人の淫賣婦のうへに落ちてゐるらしく、服部は椅子の腕木から乗り出すやうな格好をして、酔つた眼を輝かしながら頻りに饒舌つてゐる。署長は威厳を示すやうに鬚をひねくりながら、時々代

議士と服部との顔を交互に偷み、て漸次とその話の方へ興味を惹かれて來るらしかつた。

「……そりや日本人のゴケなんぞ買ふ口にしたらお話にならねえ程安値なもんでがすよ、土地馴れねえもんだと随分ボラれることも御座んすが、まあ大概が内地並です。流刑人だとか云ふんで、なかにや随分人相のよくなえ女も居りますが、まあ概して金にさへなりやい、つてな捨つツ鉢なのが多う御座んすなあ。その道の人に聞くと、露西亞の内地の女よりも他國のものが多いつて話ですが、貴方がたは世界を跨にかけてお歩きになる御商賣ですからよく御存知でせうが、彼地の女は一體が日本の女よりも阿婆摺れに出來上がつてるやうてがすな」

「さあ、さうてせうかなあ。私は餘り歐洲航路の方の經驗がありませんから知りませんが、……」と、事務長は腹を抱へて笑ひながら、答へて、「それてなんですか、さういふ女達は矢張り普通の魔窟式な家に置いてあるんですか？」

「い、え。それが面白いんです。署長さんの前で露西亞ゴケの話も異なもんですが、どうぞ惡からずお目こぼしを。ははは、……」

「こりや面白い。却つて御参考になつてい、かも知れんなあ」と、代議士は一杯頬張つた口を

もぐもぐさせながら大聲を出して笑つた。
 「いや、おほきにさうですな。」と、署長も苦笑して、「刑事の苦心談でも聞くつもりで聞きませう。」

「はは、お許しが出たからにや公然と一席辯じますかな」と、服部は體の格好をかへながら卓の上へ兩腕をついて得意さうに語り出した。

「私の行つたのは丁度麥粉の買出しにいつた歸りてしたが、外からみちや一向普通のロスケ街の百姓家と變らない構へなんです。矢張り國旗を軒へ出しましてな、壁には變挺な繪を描いたピラが張りつけてあるんです。丁度女關のやうになつてる土間から上ると中は十五六疊も敷かろうつてえ天井の低い室でしてな、例のベエチカにや薪がかつかと燃えてゐるんです。よく覺えちやるませんが何でも隣にや玉場かなんか附いてゐるやうで、かちかち球の衝突かるやうな音がしてゐました。さうして西洋の胡弓を弾いたり、唄をうたつたりする聲が騒々しく聞えて毛唐の騒ぎやあ豪う御座んすから、一人で三人前も嘩いてゐるやがるんです。私は初めてのことですからさつぱり容子が分りませんからな、一緒に連れて行つて貰つた伴れの男——此奴あ浦

鹽に長くるやがつた奴で、その道にかけちや黒人なんです。そいつにすつかり任せて、お大盡面をして椅子に腰をかけてゐますと、やがて出て來ました。更紗形の桃色の布のくつついた洋服を着やがつて、白粉をべつたりくつつけてな、そして敵方ばかりかと思つてやすと、そんな女が三人も四人も出て來やがるんです。そして譯も分らねえことをべちやくちや饒舌りながら矢鱈に嬌態をしやがるんです。何でもその時にその見立てをするんださうで……」

その言葉が終るか、終らない途端にすぐ眞上の甲板の方で時ならぬ靴音が聞えた。何でも五人の群が急ぎ足に船尾の方へ驅けてゆくやうな足音で、それが通り過ぎたかと思ふと今度は何處かで鎖の摺れるやうな異様の物音がする。

一同はぴたりと話を抑へられて、互に顔を見合はせた。誰ひとり口を切るものもない瞬間に、今度は突然、消魂しい非常汽笛が食堂のなかの靜かな空気を劈いて響き渡つた。續いて憎えたやうなサイレンが壁にぶるぶると顫動を與へながら二聲、三聲。それと同時にどうしたものか船は俄に船脚を落として、甲板では更に新しい動擾が聞えはじめた。
 「どうしたんだ！」服部の話しにうっかり氣をとられてゐた事務長は先づ色をなして立ち上が

つた。

「どうしたです。衝突ですかッ！」と、署長は着くなつて弾ねとばされたやうに椅子を離れた。それとともに食堂の隅の何處かへ、息づまつたやうな慄へを帯びた聲が、

「暗礁だッ暗礁だッ」と、叫ぶのを聞くと、ぼんやり呆氣にとられてゐた服部も、代議士も、支廳長も一齊につつと立ち上つて、度を失つたやうに眼を据ゑながらどやどや食堂の出口の方へ駆け出した。皿やコップの落ちる音が消魂しく響き渡つて、もう一室の十五六人は出口へ押し重なつてゐた。慌て、フォークを持つたまゝうろろしてゐるものもあれば、なかには又笑ひながら落ちてその騒ぎを制してゐるものもゐた。

眞先に戸口を出た事務長は折よく甲板の方から駆け降りて来る船員を捕へて、

「どうしたんだ？」と、言葉鋭く訊いた。

「あッそこにおいてゝしたか。いや、今ケーブルクラツカアの處から投身したものがあつて……。」

「えッ投身？」と、事務長は安堵の色を現して、「さうか、そんならい、が、餘り騒ぎがひどい

からボーイラアにでも故障が出来たんかと思つた。航路には異状はないんだな？」

「は、今梶田運轉士が報告に参ります。」と、云ひ捨て、その船員は忙しげに機関室の方へ駆けぬけて行つた。

「皆さん、御心配には及びません。今お聞きのとほり投身者があつたんださうで、もう程なく動きまますからどうぞお静かにお食事をなすつて下さい。」と、事務長は落着いた微笑みをみせながら群衆を顧みて云つた。そして支廳長や、代議士の方を向いて、

「私ちよつと行つて見て來ますから。」と、云ひ残して、これも大跨に甲板の方へ出て行つた。

「や、どうも實に膽を潰しましたよ。暗礁だなんて仰有るもんですから、私はもうすつかり死んだ氣になつちやつて、これ御覽下さい、まだ手がぶるぶる慄へてゐますぜ。」と服部は代議士の前へ小刻みに慄へる指の股を出してみせながら笑ひ聲で云つた。「私と來ちやあから意氣地がねえんで御座んすから、こんな大海の眞中で嚇かされちや全く助かりませんや。」

周圍にゐる人々は安堵の歡びとともにその滑稽けた語調を聞いて高く笑つた。

「いや、どうもあの汽笛を聞かされちや誰れしも膽を潰すよ、どうして又投身位にあんな非常

汽笛を鳴らすんだらう。人騒がせにも程があるぢやないか」と、代議士はさも不服らしく云つた。署長は鐵柱につかまりながらその顔を見て白けた笑ひを浮べたが、胸はまだ静まらぬとみえて、一言も口をきかなかつた。

一同はまだざわついてゐる他の船客の間をぬけて、考へ深い眼眸をした支廳長を真先に一人づゝ再びもとの席に就いた。そこらではボーイ達が薄笑ひをみせながら床に落ち散つた皿や、硝子の破片を拾ひ集めてゐるたが、それをバケツの中へ擲り込む度に神経に針を打つやうな鋭い音が響いた。折角熟しきつてゐた食堂の中の柔かな氣持は全く崩れて、何處か落着かぬ不安の影が壓しか、つてゐるやうに、四邊はひどく騒然してゐた。

「あ、折角い、氣持ちに話しが弾ずんでゐたのに、すつかり腰を折られてしまつた。」と、代議士は真先に盃をとり上げながら、「一體この寒中に投身をやるなぞはちつと御念がいきり過ぎてるますなあ。死ぬ當人も難儀だらうが、第一同じ船に乗合はせたものが迷惑だ。」

「さやうさ。どうせ死ぬんならなにもそんな寒い思ひをしなくても、別にいくらもお手輕な方法があるんでがすからなあ。」と、服部は面白さうに相槌を打ちながら、飲み度くもなさ、うに

盃をとりあげたが、「一體何者でせう。男でせうか、女でせうか。」

「さあ、そりや無論船客でせうが。冬の航海にやどうも事件が多くつて困る。」と、署長は重々しく首を振りながら獨言のやうに呟いた。

そのうち船は全く進航を止めて、今度は反對に少しづつ、逆航しはじめた。そしてゆるく横波に乗りながら漸次と速力を早めてゆく、服部はそわそわしながら四邊をみまはして、取留めもなく語られる室内の話聲に聞き入つてゐるたが、やがて二三人の客が立上つて出口の方へ出てゆくのをみると、急に堪まらなくなつたやうに自分も立上つて、

「何だかかうしてもゐられませんか。ひとつ見物して來やせう。」と、好奇心に充ちた眼で代議士を促して、披けた外套の胸をつくるひながら出口の方へ歩いて行つた。後に残つた人々は室外の寒氣に恐れをなして暫らくの間躊躇してゐるたが、端に坐つた船客達が一人づゝ漸次と濃綠色のカーテンの外へ出てゆくのをみると急に衝動を感じたやうに立上つて、がやがやいひながら到頭その跡を逐つた。火の消えたやうな顔容をして押黙つてゐた清田までが何處か生々とした表情をみせながら跡から隨いて行つた。そしてがらんとした卓子の前には支廳長ひとり意

地の悪さうな眼つきをしながら残つた。

一同はほの暗い廊下の行詰りのところで落ち合つて、急に温かい食堂から出た寒さに慄へながら甲板へ上る階段をのぼつて行つた。その闇をあけて櫓の側へ出ると、吹きさらしの舷を越えて吹き寄せてくる氷のやうな寒風に突如さつと裾をあほられて、殆んど云ひあはせたやうに立止まつたまま、齒を喰ひしりながら惜えたやうな唸めき聲をたてた。

甲板は雪明りて何處となくぼうつと明るかつた。方々の船具の蔭や、船口の蔭にはほの白い吹き溜りが出来て、通風機や、ボートの姿が薄明りのなかに異様な巨怪のやうな黒影をみせてゐた。そして櫓の途中に懸つた燈火の光の圈内には櫓綱から垂れ下がつた氷柱が臙げにきらきら光つて、粉雪は烟のやうに渦巻きながら降りしきつてゐた。一同は吹き込んで来る雪のなかを小走りに駆けぬけてぞろぞろ船尾の方へ行つた。ボートの上へ凍結した雪片や、波のしぶきでともすると脚をとられさうなのを強ひて踏みしめながら、錨機の傍へ出ると、そこにはもう二十人ばかりの船員や、船客が薄暗い手提燈の光のなかに奇集まつて、何やら心配さうにごとごとと呟きながらほの暗い海の面を見降ろしてゐた。

左舷の方からは既に二艘の救命艇が卸されてゐた。大きな曲波が舷を撫で、ゆく毎に、艇燈の光が波に走つて、狭い胴の間で押し合ひながら立働いてゐる水夫達の姿が朦朧とみえてゐる。そして本船の舷へごとりとくと打當る鈍い響きと一緒に物臭さうな呼び聲も聞えて来る。

『おい、フツクは入つたか？』年老つた艇長らしいしや嘎れ聲が叫ぶ。

『へえ、入りました、舳の方へ置いときました。……』

『氣の利かねえ野郎だな。こんなこつてブウイが使へるか。ロツプは左へ巻いとかなくつちや可いねえぢやねえか。』など、年老つた聲は頻りにぶつ／＼口小言を云つてゐるが、そのうちにやつと準備が整つたと見えて、救命艇は二艘とも舳の方からついと本船の舷を離れた。そして歎息するやうな鋭い滑車の音がきけると同時に少しづつ、遠のいて、艇燈を粉雪の靄のなかへ光らせながら大廻りに船尾の方へ漕いで行つた。

一同はそこらに立つた人々の間に立交つて黙つて艇の行方を見送つた。やがて二艘とも漸次と闇のなかへ姿を隠してしまふと、遠くの方で波の音の合間あひまに、

「おうい。おうい。」といふ譯も分らぬ深沈とした叫び聲だけが幽かに聞えて、二艘は別れ／＼になつて大きな曲波に弄ばれながら、附近の海上を搜索しはじめたらしかつた。服部は極度の好奇心と、不安とに悩まされてゐるやうな調子で、到頭すぐ前に立つた船員へ話しかけた。

「一體投身したのは矢張り船客なんですか？」

「え、三等船客ださうです。」その男は若い顔容の割に落着いた聲で答へて、隣にゐる運轉士らしい男に、「なあ、君女だとか云つてゐるが、さうかい？」

「うん、まだ若い女ださうだ。何でも夫婦連れて情死をしようとして、男の方だけ助かつたんださうだ。」

「へえ、夫婦でなあ。」服部はすぐその話の後をひきとつてさも感に打たれたやうな調子で、「まあどんな深い譯があるのか知れねえが、こんな處で身を果すなんてよく／＼の事ですなあ。」
 「さうですとも。」署長は煙草の火を暗に瞬かせながら興味なさ、うな聲で云つて、「ふと思ひついたやうに、代議士の方を向いて、「これも先刻お話の施政方針の犠牲かも知れませんか。」

「きつとさうでせう。彼地で越年が出来なくつて歸國してゆく途中、絶望して投身でも企てたのかも知れませんが。果してさうとすれば實に悲惨な話だ。」と代議士も署長の火をかりて煙草を吸ひながら、「全くさう云ふ例はいくらもあるのですからなあ。殊にこんな晩、こんな外海で死ななければならぬ二人の心事はどんなでせう。」と妙に今迄とは違つた低く沈んだ聲で云つた。

すぐ傍に寄集まつた三等客らしい一團のなかでも、また寒さうな慄へ聲がひそ／＼と囁いてゐる。

「助かるてせうかなあ。」

「さあ、どうですか知ら。なにしろこのお天気ですからなあ。」

「もう七分間も前に飛び込んだらう話ですが……」九州人らしい濁つた聲が口を挟む。

「さうですか。」と、又別な聲が、「それぢやあまつ死體も上がらんでせうな。」

「なんでも隅の方の柵に居つた男と女ださうぢやありませんか。隣で見とつた人の話しに背か

ら二人で何かごと／＼云ひ合をしとつて、いんまさき女の方がさきへ外へ出て行つたんださうですな。」

「ふむ。それぢや野田寒から来た連中だな。」

「野田寒？ 一體何者です？」

「私もよくは知りませんが、人の話では木材會社の職工だとか云ふんです。十五六人の團隊でな。話の容子ではどうも秋田縣人のやうですが、もう船に乗る時からごた／＼ひどく紛紜とつたんださうです。」

一人、二人づゝ後から船客が殖えて来て、やがて其處邊には四五十の群衆が集まつた。しまひには火夫のやうな油臭い服を着た男や給仕まで出て来た。後から来たものは種々な期待や疑問をもつてさま／＼の問ひを發する。知る人も知らぬ人もいつの間にか親しげに口をき、あつて、一樣に暗い海を凝視しながら身を投じた女の評定に耽つた。そして暗い海からは針のやうな鋭い寒氣を含んだ風が時折さつと吹き上げて来て、人々の肩と云はず胸と云はずほの白い粉雪をさら／＼と吹きつけた。そして捜索に出て行つた救命艇も、う遠く漕ぎ去つたのか、そこ

らと思ふ海上からは何の消息も聞えて來なかつた。

そこへ突然、中甲板の方から騒々しい五六人の靴音が走つて來て、

「兎に角一應その男を室へ連れて來い。」と、事々しい聲で叫ぶ。

「いや、どう云つても、死體のあがるまでは動かないと云つて聞きますんです。」と、息を切らしながら他の聲が答へる。

「そんな馬鹿なことを云つたつて可かん。無理にでも引ッ張つて來い。そして怪我人の手當も早くせんと、……………」

と、同時に、眞黒な一團の人影は通風機の陰へ立止まつて、そのなか、ら二人の船員がついと別れて三等室の降り口の方へかたかたと駈けてゆく。

その騒ぎに驚かされて群衆は一齊に聲のする方へ振返つた。そしてぞろ／＼浮足だつて、知らず知らずの間にそつちへ寄つて行つた。

暫らくすると三等室の降り口からは人々の立騒ぐ恐ろしい動擾が聞えて來た。五六人の拵走つた人聲が騒々しく纏れて、戸を叩くやうな音が聞えたかと思ふと、そこからは一團の人の群

がどや／＼と溢れ出て来た。

眞先には船員に取圍まれて一人の男が狂ひながら踏めき出て来た。烏打帽をかぶつた、脊の圖ぬけて高い男で、紅い燈火の光のなかなので無論面貌も、風體も分らないが、恐ろしく興奮した顔へ聲で頻りに船員を罵りながら引ッ張られてゆく。その後から船客がこれもひどく拮高な聲で譯も分らぬことを云ひ罵りながらぞろぞろ隨いてゆく。そしてさつき通風機の陰へ立つた人影と一緒になるとそのまゝ、一塊りになつて、がやがやと云ひながら中甲板の方へ姿を隠してしまつた。

群衆は又その騒ぎでひどくざわめき出した。彼方でも、此方でも投身女のことは打忘れて口口に引張られて行つた男のことを評定しはじめた。そしていろ／＼な取留めのない想像を逞ましくしながら中甲板の方へ歩いて行つた。

代議士も署長も、服部もその群にまじつて歩いて行つた。なかでも服部はひどく興奮した口調で、

「怪我人があるつてえぢやありませんか。この騒ぎのなかに喧嘩でもおつばじまつちや事です

なあ。

「こりや無論さつきの投身者に關係した事件でせうが、」と署長は酔ひざめの生欠伸をしながら「併し、刃傷沙汰でもあつたとすれば容易ならん事件です。」

「いや、これには何か深い事情があるんでせう。この事件の裏にはきつと何か私の持論に裏書きをして呉れるやうな事實が潜んでゐるにきまつてゐる。」と、代議士は寒さうに肩をふるはしながら調子のはづれた聲で云つた。

さつきの階段のところへ来ると、そこには二人の船員がゐて、騒ぎながら廊下の方をさし覗かうとする船客の群を制してゐた。代議士達はその間を摺りぬけて二等船室の側の細い階段から廊下へ降りた。そして外套に附りか、つた雪を拂ひ落としながら食堂の方へ歩いて来ると、そこで忙はしげに駈けて来る事務長にはたと行逢つた。

「やあ、お寒いのにお揃ひで。私ももうちきに責任を終わりますから。」と、事務長は笑ひながら云つた。

「どうも御苦勞ですなあ。ときに怪我人があると云ふ話ですが、何か別な事件でも起つたんで

すか。署長は訊いた。

「いや、それで實は混雑を極めて居るのです。投身者の夫と云ふのが、連れの男と争論をして怪我をさせたものですから。」

「怪我と云ふと、切れもの細工でもやらかしたんですか？」と、服部は好奇心を頬に輝かしながら差出がましく訊いた。

「いや正宗の囃で頭を五針ばかり縫ふほど怪我をさせたのです。」

「それで投身者の身許は分つたのですか、署長はいかにも場馴れた専門家らしい威厳を示しながら訊いた。

「え、まあ一應は。なにしろその男の方がまるで狂人のやうになつてゐるもんですからまだ事情はさつぱり分りませんが、或は取調べてみた結果で意外な事件になるかも知りませんのです。いづれ後程ゆつくりお話し申しますが……。」

「と云ふと何ぞ別な犯罪でも……。」

「何分當人の興奮が激しいので、云ふことが支離滅裂でまるで要領を得ませんが、なんでも投

身したのではなくて、故意に船から突き落したやうな形跡があるんです。いづれあとで今一應調べてみた上で貴方にも御檢證を願はなければなりません。」

「さうですか、さうなると面倒ですなあ。困つたことを始めたもんだ。」と、署長はひどく落着いた態度で、「死體、……いやまあ助かるかも知れんが、投身者の方はどうなるんでせう。」

「もうありやとても駄目です。唯義務として一應搜索船を下ろしてみたいけのことで、なにしろ投身した場所から二哩半も進航して後のことですからなあ。どんなことをしたつて死體の見附かる筈はありません。いづれ又あとでお目にかゝります。」と、事務長はあとから出て來た船員と一緒にそ、くさ船尾の方へ驅けて行つた。

「どうもえらい事になつたもんですなあ。思ひがけない時に思ひがけない事に遭遇したもんだ。」と、服部は呆れたやうな顔容をして云つた。

「どうも困つたもんで。署へ歸つても明日は又これで潰されます。」

「い、三面種が出来ましたな、併し私にとつてもい、材料で。」と、今迄感慨に充ちたやうな沈黙を守つてゐた代議士は温かい廊下へ入つたので急に景氣づきながら、「兎に角もう一度食堂へ

歸つて飲みなほさうぢやありませんか。こんなことをしてゐたら體ごと凍つちまひますぜ。」
 「さうですな。もうひと温まり温まりますかな。」署長も笑ひながら云つて、「服部さんは如何
 です。」

「へえ、難有う御座んす。私は後程参りませう。折角今まで寒い思ひをして待つてたんでがす
 から、私はもう一度甲板へ出て来て来やせう。ボートが死骸でも乗つけて歸つて来りや見もの
 ですからなあ。」

「投身者に醜婦なしさ。一應檢分して置く必要がありますかな。は、は、は。」と、代議士は快活
 に笑つて、「併し今の男の癖とすりや寒い思ひをしてみる程の價値もなさ、うですなあ。」

「さう仰有つたもんでもありますまい、かう見えてもまだ色氣がありますからな、女となると
 死人でも見てえんで。は、は、は。併しこんなことはとても陸にちや見られませんかからなあ。
 何も學問でがさあ。」と、服部は妙にいこちな顔容をしながら又もと来た道を甲板の方へ引返へ
 して行つた。

代議士と署長はそのまゝ、食堂へ歸つた。もう船室へでも引上げたのか、食卓には支廳長の姿

はみえなかつた。煙草の吸ひ殻ばかりが灰皿の上へ堆く残つて、食器もあらかたかたづけて
 あつた。そして人氣の薄くなつた室内には何處からともなく寒い風が吹き込んで来るやうな氣
 がして、調理室の方で脂汁のいりつく音さへ何となく寂しかつた。

二人は新たに料理を命じて、又盃をあげだした。そして投身女と、殺傷の出来事とを樺太
 といふ背景にすつかり結びつけて論じてゐると、間もなく服部が寒さに蒼ざめた頬に失望の色
 を浮べながらぼんやり歸つて來た。殆んどそれと同時に船は又長い汽笛を残して進航しはじめ
 た。

もう十二時を過ぎて後のことである。四人の寝た二等室の入口の戸をことごとく靜かに叩くも
 のがあつた。

まだ眠られずに種畜場の成績表を読み耽つてゐた支廳長はふとそれを聞き咎めて、痛む肩を
 抑へながら起き上つて鍵を外した。

「やあ、これはどうも恐れ入ります。もうお寐みだつたんぢや御座いませんか。」と、云ひなが

ら開けきるのも待たず室のなかへ首だけ差し入れたのは思ひもかけぬ事務長だった。
 「貴方でしたか。いや、まだ眠つちやるませんか。」と、ベッドから厚い毛布をとつて被りながら、「寒いすなあ。」

「どうも今夜はまた格別です。」と、事務長は愛想よく笑ひながら、「お妨げして済みませんが、實は先刻の件で署長さんには是非お立會を願ひ度いと存じまして。」

「あ、さうですか。ぢやお起こしなすつたらい、てせう。」と、支廳長は自分への所用でないのを見届けるとその儘ベッドへもぐり込んだ。

事務長は室へ入つて来て、上の棚に寝た署長のベッドのカーテンを細めにひらいた。そして小聲で幾度も呼び起こした。と、署長は熟睡して夢でもみてるたと見えて、取留めのない讒言のやうなことをぶつぶつ呟いてゐるが、やがてやつと正氣づいて、さも吃驚したやうにむくむくと起き上がった。

「折角お寝みのところを甚だ御迷惑ですけど、あの件で一寸御檢證を願ひたいのですが……
 ……」と、事務長は更にカーテンを擴げて云つた。

「あ、さうですか。何か又新しい確證でも上りましたかな？」

「え、今もう一度當人の精神の靜まつたところで調べてみました。どうも故意にやつたことらしいので、それに怪我をさせられた方の男も會社かなにかの金を拐帶して樺太を遁げて來たらしい形跡があるんで、事件が大分錯雜して居るのです。」

「さうですか。兎に角行つてみませう。」と、署長はその儘低い梯子を下りて床へ立つと突如顔を擧めて大きく伸びをした。そして眠さうに幾度かつ、けさまに欠伸をしながら靴をはいたり、上着を着たりした。

その物音で眼をさましたのか、支廳長の上の棚に寝てゐた代議士はカーテンの陰からぬつと大きな顔だけだして、ものも云はずに血ばんだ眼でキヨロキヨロ四邊をみまはした。

「どうもお騒がせして済みませんな」と、事務長は代議士には笑顔をみせて、署長が服を着てしまふと今度は「お寒う御座んすからどうぞ外套を着て被來つて下さい。」と、外套の世話までしてやがて、二人はそこへ室を出て行つた。

その様をみると代議士はやつと我に返つて下の支廳長の方へ首を延ばしながら、

「どうしたんです。こんなに遅く。」

「なんだか先刻の投身のことかむづかしくなつたとかで、署長さんをよびに来たんです。」

「ぢや、愈事情が判明したんですかな。」

「さうも云つてゐませんが、……」と、支應長は馬の寫眞のついてゐる頁を繰りながら興味もなさ、うに欠伸をした。

代議士はその儘口を噤んでしまつた。と、今度は向側のカーテンが開いて、そこから服部が首を出した。先刻から眼をさまして話を聞いてゐたものと見えて、彼は好奇心に充ちた口調で代議士に話しかけた。

「矢張り投身ぢやなくて、わざとやつたんださうです。そしてな、怪我をさせられた男の方も拐帯かなんかしたのがバレたらしい話でしたぜ。」

「さうですか。何だか薩張り譯が分らなくなつて来たな。第一情死だと云つてゐたのが故意に殺したといふのも變だし、一體その怪我をさせられた男と云ふのはどう云ふんです。」

「さつき事務長さんのお話ぢや同じ連れのなかの一人だつてえちや御座んせんか。」

「すると金銭上の遺恨でもあつたんですかなあ。拐帯でもする程の奴なら随分ひどいことするだらうし。……」

「さあ、そこがどんなもんですか、私もさつきからかうやつて寝ながら考へてみたんですが、服部は益々興味をもつて来たらしく、ベッドから少しづつ、乗り出して、煙草に火をつけながら、「併しかうなると愈々面白くなりなますなあ、なにしろ續きものでも讀んでるやうで、先がどうなるか譯が分らねえんですからなあ。滅多に出遇さねえ出来事ですよ。」

代議士は再び口を噤んで眼を据ゑてゐたがやがて沈んだ聲で、

「しかし可哀相なのはその殺された女だなあ。どう云ふ事情があるのか知らないが、こんな海へ乗り出して投げ込まれちやさぞ死際が悪かつたらう。」

「さやうさなあ。今頃はあの眞暗ななかをブカリブカリ流れてゐるでせうが……」

二人は互に別な考へに落ちてゆくやうにそれなり押黙つてしまつた。と、舷を打つ波の音が急に思ひ出したやうにざあッざあッと物凄く響いて、その絶え間にはひそやかな風の音に紛れて、呟くやうな小刻みな機關の音が船室の壁を傳はつてかすかに聞えて来る。

やがて服部は何と思つたかむつくりベッドから起きあがつて、外套をはおつた上から毛布を引つ被ぶつて、スリツバアの足音を忍びながらそつと室を出てゆかうとした。

「はゞかりですか。」と代議士がそつちを振り顧りながら怪訝さうに訊くのを彼は耳にもかけず、「いやちよつと。」と、それなりこつそり戸をしめて出て行つた。

跡に残つた代議士は急に静けさのなかへ取り残された寂しさを味はふやうに仰向けに寝て、眼ばかりばちばちさせながらぼんやりしてゐた。下では支應長がかさこそと頻りに頁を繰る音をさせてゐるが、それもいつの間にかやんで、ゆるく上下する船體の動揺と、もに明るい寂寥が漸次と凝つて來た。

暫らくすると代議士は到頭もちろしなから起き上つた。そして床へ降りて隅の方に置いてあつたトランクのなか、らウキスキイの角壘をとり出した。そしてアルミニウムの盃をだし、

「如何です、一盃。莫迦に寒いぢやないですか。」と、支應長の方へ差出した。と、彼はベッドのなかで物臭さうに寢返りを打ちながら、

「え、私はもう結構です。どうも睡眠が來んので。」

代議士もその上すゝめもせず、その儘それを持つて又ベッドへ上つた。そして毛布のなかへ丸く寢そべつて、旨さうに口を引歪めながらちび／＼やり出した。

十分経つても二十分たつても服部は歸つて來なかつた。

そのうちに時は容赦もなく過ぎて、深夜の交代を報ずる時鐘が甲板の方でかすかに鳴つたと、間もなく入口の戸が開いて、頭から丸々と毛布を被ぶつた服部がぶる／＼慄へながらやつと歸つて來た。顔の色は寒さに蒼ざめて、唇のいろまでなくなつてゐる。

代議士が起きてゐるのをみると、彼は水鼻汁を啜りながら、

「いや、面白い事になりましたぜ。今事務室の戸の蔭からすつかり立聞をして來ましたが……」

「外はさぞ寒いでせう。」代議士は盃を置いて、カーテンの蔭から又首だけ突き出しながら云つた。

「や、寒いなのつて、まるで氷のなかへ入つてゐるやうです。」と、服部は首をかめてべ

ツドの端へ坐つて、『なにしろ廊下にあるて、息が凍りさうなんですすからなあ。』
 『御執心なこつてすなあ。』と、代議士はクス／＼笑つて、『どうです、寒さしのぎに此れでも一
 杯やつたら』と、片手でウキスキイの壺と盃とをカーテンの外へ出す。

『やあ、こりや結構なものがありませんな。有難う御座んす。』と、服部は嬉しうに受取つて、
 早速なみ／＼と注ぎながら、『併し全く世間のこと、云ふものは面白いもんですなあ、女が敵と
 はよく云つたもんだ。』と、先の好奇心を咬るやうな調子で云つた。

『て、あの一件は一體どう云ふんです？』

『それがががす、今向ふてお白洲がはじまつてるんですが……』と、一息にぐつと飲
 み干して、『何にしる鍵の穴へ耳をおつ、けて聞いてるんですすからよくは分りませんが、事情が
 ひどくこんぐらかつてゐるんです。今すつかりお話しやすが、矢張りあの投げ込まれた女が一
 番よくねえらしいんで。』

彼はちび／＼盃を嘗め乍ら身振手ぶりで講談でもやるやうに調子づいて語り始めた。……

この犯罪に關與した者共は皆森の木材會社の歸國團だつた。それは丁度國境の劃定がはじま

ると同時に拂ひ下げられた森林の一部を基礎として起つた小會社で、多くは秋田縣人の手によ
 つて經營されてゐた。初めの間こそ多少の利益をあげてゐたが、土地に便宜は少し、固より遣
 繰で持つてゐた所謂泡沫會社のことであるから二年も経たないうちに漸次帳尻が割れて社運は
 日に日に傾いて來た。

彼等は丁度社運が下降しかけた頃、新聞廣告の堂々さと、募集人の甘言とに欺かれて、住み
 馴れた郷土を捨て、樺太へ押渡つた輩の一部である。或者は早く見切りをつけて他に生活の
 道を求めてしまつたが、最後まで踏み止まつた彼等は到頭その日の衣食の途にも窮するやうな
 羽目に陥つて、越年に入るとすぐ堪まり兼ねて九死一生の思ひをしながら漸う會社の工場のあ
 る山地から出奔した。そして今その歸國の途次にあるのであつた。

海へ投げ込まれた女の夫と云ふのは會社の測量夫であつた。初めは僅かな日給のなか、貯
 金をするやうな實直な男であつたが、眞岡あたりを流浪して歩いてゐた酌婦上りの今の女に引
 懸つてからは、到頭散々に身を持ち崩して、博奕はうつ、酒は飲む、終には勞働のもとな
 る器まで毀して、重い肺病に罹つてしまつた。

女はそれをい、しほに男を捨てた。同じ小舎に寢起をしてゐながら、病みほうけた彼をまるて犬猫のやうに虐待した。そして同じ人夫仲間の誰彼と公然て情を通じた。そしていろ／＼な出来事のあつた末、頭最後に今夜負傷した男を自分のものにした。彼は會社の帳方だつた。帳面をもつて伐り出した材木の、高を巡視して歩くうちにふと彼女に馴染んだ。そしてしまひには工場の誰彼からも爪弾きされるやうになつたので、到頭會社の金を拐帶して二人で眞岡の方へ夜逃げをしてしまつたが、その後は何處をどう隠れて歩いてゐたのか薩張り行方が分らなかつた。

そのうちに工場の運命は日々に迫つて、越年後には米や鹽を得る手段さへなくなつたので彼等は愈々一團になつて山を下ることに決した。重い肺病で苦しんでゐた測量夫も同郷のもの、情に縋つて矢張りその群にまじつた。そして一同揃つて乗船した時には函館までゆく旅費のほかに、殆んど食事をとる金すら残つてはゐなかつた。

船が大泊へ着くと、彼等は思ひがけもなく先に出奔した帳方と、その女が相當な身装をして乗つて來るのにはたと出遇はした。激しい争論は端なくもそれから起つた。そして摺つた揉ん

だの末、前非は一切秘密にするから窮迫した彼等の爲めに幾らかの金を出せと云ふことになつた。それを素氣なく拒絶した、めに到頭絶望した測量夫は女を海へ突き落とし、その上帳方だつた男にまで淺からぬ怪我を負はせたのだと云ふ、……

「何しろ事務室はえらい騒ぎなんです。あの狭いなかへその測量夫つてえ男と、帳方の男とそれに人夫仲間の世話方らしい男が三人も入つて、あゝでもねえ、かうでもねえてひどく紛紜してゐるんです。そして秋田辯と來たら他國の言葉より一倍騒々しく聞えますからなあ。」と、服部は盃をとりあげながら猶も語りつづけた。

「そしてその論判のなかで、測量夫つてえ男は泣き聲を振り絞りながらどうして私あ先のねえ體だからどうしてもこの男を殺す。殺して私も立派に死んで見せるつて怒鳴り散らしてゐるんです。全く無理のねえ話で御座んさあなあ。」

「さうさ。可哀相なものさなあ。そんな酷い目に逢はされりや誰だつて殺す氣になる。殊に先のない命だつたらなあ、……」と、代議士は起きなほつて、しみん／＼云ひかけると丁度その時、外の廊下でがや／＼人聲が聞えた。そして大勢の人の靴音がマツトの上を靜かに近づ

いて来た。

服部は何かの衝動を感じたやうにベッドから飛び出して、突然室の戸を開けた。と、その途端に、烏打帽を被つた見すばらしい洋服着のさつきの男が兩方から荒くれた水夫に腕を執られて、その後から襟の開いた外套や、同じやうな垢じみた風姿をした男に護られながら通り過ぎて行つた。

「お、あの男ですよ。」と服部は我を忘れて小聲で叫んだ。代議士もむつくり起き上つて、床へとび降りて、戸口から顔を出してその後姿を見送つた。

そこへ年老つた船長を先に、事務長や署長がやつて来た。署長は船室の前で立止つて、

「ぢや私はもう御免蒙ります。兎に角すべてはお任せして置きますから。」

「いや、どうもいろ／＼御面倒をかけまして、……」と、船長は帽子の庇へ手を當て、鷹揚に挨拶した。

「ほんとにお氣の毒でした。」と、事務長はその後に語をついて、「何かは明日のことにして、確かに今夜中はお預かりして置きますから。」

「どうぞ宜しく。どうもあの容子ぢや自殺などをやらんとも限りませんから、さうなると又事が面倒になりますから、どうぞ充分御監視をなすつて下さい。」

「は、それは充分。船艙にや二人ばかり番をさせて置きますから。ではお寐み。」と、云ひ残して二人は汽罐室の方へ足早に歩み去つた。

署長は室の戸を閉ぢると笑ひながら、「まだ起きてお出で、したか、どうも面倒なことが出来て、到頭眠りそこなひました。」

「どうも御苦勞さまでしたなあ。廻り合はせの悪いときにや悪いもんで、……」と、服部は慰めるやうに云つて、「一體、あんな男はどんな罪になるんでがせうな。」と、物知り顔に訊いた。

「さあ、まあ豫審へかけて見ると判明しませんか。……」と、兎も角明朝は私の署へ引取らなければならんのですから、旅疲を休めることも何も出来ませんまい。」

「全く御迷惑ですなあ。今服部さんの話ぢや大分事情が纏綿してゐるやうですなあ。」と、代議士も支廳長の眠つたベッドの足の方へ腰かけながら云つた。

「一寸立聞したばかりなんてすから分りませんが、なんでも怪我をさせられた男が間男して、遁げたんぢやがあせんか。」

「え、そんな事ださうですが。……」と署長は話を避けるやうな口調で、そろ／＼寢支度をしはじめた。

「樺太にやそんな悲惨な事件は澤山あるんでせうからなあ。私もい、經驗をしました。」と、代議士もそれと一緒に立上つて云つた。

「え、餘り珍しい事でもありません。……」と兎に角私は明日もありますから失禮ですがお先に。」と署長はその儘、機械體操でもするやうにベッドの端へ手をかけてついと上つた。そしてする／＼と毛布のなかへもぐり込むと、大きな嘘をひとつして、すつとカーテンを引いてしまつた。

代議士も、服部もそれをみると興ざめた顔をして間もなく各自のベッドに入つた。

翌朝十時を打つと間もなく、敦賀丸は靜かな底力のある氣笛を長々と吹き鳴らしながら小樽

港の防波堤のなかへ入つて行つた。滑らかな水の面に白い霧を残しながら漸次と船脚を落として、船首を高島の方へ向けていつもの錨地へ就いた。

もう雪はすつかり降りやんでゐた。灰色に白けた雲は低く山々の中腹まで垂れ下つて、その雲際から海岸までなだらかな傾斜のなりて廣がつた港の街々は幾何學的な線を残したまゝ、一帯に深い雪に埋もれてゐた。ところどころに紅い煉瓦の壁や、どす黒い崖の腹をみせてゐるぎりぎりで、すべては空の灰色を反映させて極めて透明な白色を呈してゐた。そして高い煙突や、停車場と思ふ邊からもくもく吐き出される煙は銀色に薄れた大氣のなかに定かならぬ縞を描きながら凍えついたやうに漂よつて、鐵板を打つ音や、車の轍の音や、汽笛の響などが雜然としたとよみをつくつては幽に水を渡つて聞えて来る。蒼ざめた海の面には海の鳥が四五羽づゝ群をなして高く、低く飛びちがつてゐた。

船室では皆荷物をかたづけけるのに忙はしかつた。毛布を折疊んだりトランクの鍵をおろしたり、がやがや騒ぎながら立働いてゐた。代議士は朝酒のきゝて頬を眞紅に火照らしながら例の快活な調子で、

「さあ、これでひとわたり用意も済んだと。まあ幸ひ荒れなくつて仕合はせてしたなあ。曉方にやきつとひと暴れ來ると思つてゐましたが。」

「いや、私などはもうあれで澤山で御座んすよ。船にや餘り強い方ぢやないもんで御座んすから、かうしてベッドへかじりついたまんまで一時はどうなることかと思つてゐましたよ。」と、服部は船酔て蒼い顔をしながら云つた。

「はは、ひとしきりはひどく弱つてゐたやうでしたな。しかし冬の航海ぢやこんな静かなのは珍らしいでせう。」

「さうですとも。それにガスと云ふ奴が來ませんでしたからなあ。支應長はベッドのなかへ腰を入れて、古びた折靴のなかの書類を整理しながら「ガスでも來てその上流氷でもあつて、四時間も五時間も海の中へ立往生させられる時は全く酷いですからなあ。」

「さうでせうとも。併し立往生ならまだ我慢も出來ますが。こいつががぶりがぶりと搖れて來て、體が奈落へても沈んでゆくやうにすうつと上つたり、下つたりしはじめちや全く叶ひませんな。正直なところ錢金にや換られなくなりますますからなあ。」

そこへ一番遅くまで寢てゐた署長が楊枝を使ひながら食堂から歸つて來た。

「やあ皆さんもうお支度が出來ましたな。頻りに吃逆をしながら煙草に火をつける。

「昨夜は随分御迷惑のやうでしたな。」と、支應長は整理に氣を取られて顔も上げずに云つた。

「え、あのために到頭夜つびて安眠が出來ませんでした。職務とは云ひながら、勝手を云へば私には直接責任はないのですからな。」

「さうでせうとも。海の上のことですからな。」と、服部は横合から口を入れて、

「あの犯人にやあの後別に變つたことも御座んせんでしたか。」

「え、ゆふべ夜どほし騒いどつたさうですが。……」

そこへ又ボーイが荷物の手配りをしに入つて來た。そして一々數をよみあげながら甲斐々々しく廊下へ運び出した。

代議士は陶然としたやうな眼つきをしながら船窓から海をみてゐたが、

「どうもい、景色ですな。小樽まで來ると内地へ歸つたやうな氣がしてすつかり安心しましたよ。」と、ゆつたり煙草の煙を吐きながら、「如何です。解舟の來るまでにはまだ間があります。」

から其處邊がかたづいたらひとつ甲板へ出てみようぢやありませんか。』
 やがて彼等は寒がりな支應長まで誘ひ出して甲板へ出た。階段のところを下から支應長の用
 をき、に上つて来た清田に出逢つたが、彼も誰彼に丁寧な挨拶を述べながら皆の後から隨いて
 来た。

甲板はいつの間にかすつかり雪の掃除がすんでゐた。ところどころの板の凹みには滑らかな
 氷がはつて、綱具や通風機の口や、上甲板の欄干には小さな牙のやうな氷柱が美しく垂れ下
 つてゐた。そして頭から毛布を引被ぶつたり、毛糸の襟巻きて顔を包んだり異様な風體をした
 船客が、忙はしげに行き通ふ船員の間まじつて、白い息を吐きながらぶら／＼歩いてゐた。
 彼等は取留めもないことを語り合ひながら漸次と船尾の方へ歩いて行つた。そして錨を降ろ
 す機械の前へ立つて、ピストンが白い蒸氣を吐きながら動くさまを面白さうに見てゐたが、そ
 の時、突然代議士は、

『此處邊でしたな、昨夜の悲劇のあつたのは。』

『さやう、さやう。此處でした。えらい騒ぎでしたなあ。』と、服部は今更のやうに驚いた調子

で云つて、つか／＼欄干の方へ歩み寄つて、『こゝからさんぶり投げ込んだんですな、投げ込む
 時の氣持ちはどんなでしたらう。』

『無論夢中でしたらう。さう云ふ場合にや大方殺さうと云ふ意志よりも、手の方が先に働くも
 のですからなあ。』と、署長は拱手しながら答へた。

代議士も欄干の方へ寄つて服部と並んで立ちながら、

『こりや随分高い欄干だが、こゝから突き落としたり可成り力が入りますな。肺病で死にか
 かつてゐる奴にしてはよくやつたもんだ。』

『そこが一念でがせう。うぬツてえ氣で一息にやつちやつたんですな。』と、服部は芝居でもす
 るやうな滑稽けた身振りをしながら云つて、『これが大刀か何かですぱりとやつたんですと、今
 朝あたり此處邊にやまだ血の痕が方々に残つてゐて、一寸面白いとこなんですかなあ。』

『笑談云つちやいけない。さう誂へ向きに出来てゐりや文句はないが………』一同は聲
 を揃へて笑つた。

その聲が餘り高かつたのでそこらに歩いてゐた他の船客達は怪訝な顔をしながら周圍に寄り

集まつて来た。なかでも無智な顔容をした四五人連れの農夫らしい男達は東北訛のある聲で吃驚したやうに饒舌りあひながら懇々近寄つて彼等の顔をしげしげと見入つた。

やがて直ぐ真下の海の上で鈍い鈴の音とともに激しく水を掻き亂す噪音が聞えた。と、見ると會社と水上警察の小蒸汽船が船尾から真白な泡をたてながら、もう本船の舷へきてびたりと横づけになつてゐた。そしてすぐ近くに列を亂して紅い腹を浸した泊り船の蔭からは舳舟や、達磨船が幾艘となくこつちへ漕ぎ寄せて来た。

それを見ると彼等は下船の準備をするために急いで船室の方へ歸つて行つた。櫓の側まで来かゝると向ふから事務長が二人の巡査を連れて四邊に眼を配りながら急ぎ足にやつて来た。そして彼等の姿をみつけると、遠くから聲をかけて、

「や、方々探し廻つて居たところですよ。今署の方からお迎へにみえまして、……」と、巡査を署長の前へ導きながら云つた。

「や、そりやどうも御面倒をかけました。」と、署長はすぐさま巡査の方を向いて威厳を示しながら、

「お前達も寒いのに御苦勞だつた。」

「い、え。どう致しまして。御無事で結構で御座いました。」と、年老つた方の巡査は丁寧に敬禮をしながら答へた。

そこへ又代議士を出迎へに政黨の支部員らしい男や、新聞記者らしい男が六七人ぞろぞろと群をなして集まつて来た。

各自ばらばらに群をつくつて話し出すのを見ると、事務長は署長と巡査とを船橋の下へ連れて行つてごとき、何事か打合せをはじめた。

「兎に角それでは水上警察の船で棧橋まで乗せて行つて、彼處で署の方へ引取ることによませう。」と、やがて署長は高聲で云つた。

「さう願へると私の方は非常に都合で御座いますが。それからあの方の書類は認めさせて置きましたから後程お届け致します。」

「よう御座んす。署長は軽くなづいて、今度は巡査達の方を振顧へりながら、肺病患者ださうだからお前達も充分注意して連れて行け。」

二人の巡査は兵士のやうな姿勢を執りながら低く頭を下げた。そしてその儘事務長に伴はれて下へ降りて行つた。

署長は暫らくの間そこに佇んで何事か思案してゐるらしかつたが、やがてしよんぼりしてゐる御用商人の方へ歩み寄つて、

「まだ降りませんか？」

「さあ。早く陸へ上つて一休みしたいんですが、この混雑ぢやとても駄目でがせう。」

「貴方は今晚小樽へお泊りですか？」

「い、え、用が拂りましたら夜行でも函館まで出てゐたいと思ふんですが、それがないと明日の朝の連絡船にや間に合ひませんからなあ。」

そこへ今度は支廳長が清田を連れて歩み寄つて來た。そして當惑したやうな顔容をしながら、

「いや、汽車は駄目ださうですよ、今聞かせにやりましたら。昨夜の雪で俱知安から先は今朝から全然不通になつてしまつたさうです。」

「え、不通？」服部は眼を丸くして訊いた。

「明日迄は開通の見込みが立たんとか云ふことですが……」

「そりや困りましたなあ。どうもあんなことがあつて幸先が悪いと思つたら……併し私は明後日までにはどうしても東京へ行つて居りませんと商賣の方の埒が開きませんが。」ひどく困つたらしく云つて頻りに頭を掻き出した。

橋の側に立つた代議士は六七人の人々に取圍まれながら又樺太の施政方針でも論じてゐるのか、「我輩は、」と、いふ言葉が頻りに寒い風につれて聞えて來る。傍に佇んだ新聞記者らしい男は人の影で手帳を出してそれを筆記してゐるらしかつた。

その時、右舷の方で突然人々の騒ぐ聲が聞えた。其處邊にぶら／＼してゐた船客達は急ぎ足に右舷の方へ驅け寄つた。それと見た彼等もつひ心を惹かされてひとかたまりになりながらそつちへ歩み寄つた。

舷門からは丁度昨夜の慘劇を演じた男達が巡査に護衛されながら降りようとしてゐるところであつた。烏打帽の男を眞先に醜い風體をした彼等は舷から釣つた小橋を渡つて水上警察の

小旗を翻した小蒸汽へ乗り移つた。そして最後に頭から繻帯をした商人體の男が水夫に助けられながら危げに乗つた。それと同時に魚油の樽や、菰包みを積んだ達磨船の上へは三等船客の群が押合ひながらばらばらとこぼれ出た、そして船の中でも各自の風呂敷包みや、古行李をもてあつかひながら、我勝ちに席を得ようとして火事場のやうに激しく揉み合つた。

『どうもえらい騒ぎですな。あんなに急いで乗らなくてもよさ、うなもんですがなあ。』と、服部は傍の署長を顧みて、いつの間にか汽車の不通も何も忘れてしまつたやうな呑氣な顔をしながら云つた。

『どうも無教育なものには困りますなあ。あれで覆かへりでもすりや自分達の命にかゝはるのですがなあ。』と、署長も苦笑しながら答へた。

やがて警察の小蒸汽は鈴の音を響かせながら推進器で水を蹴りはじめた。そして船首を斜に向けると今迄船のところへ後向きに坐つてゐた犯罪者の一連ははじめて本船の方へ横顔をみせた。烏打帽の男は油じみた襦袢のやうな詰め襟の洋服を着て、散々に摺切れたシャツをその袖口から長く垂らしてゐた。蒼ざめた鬚のやうな長い顔に鬚を蓬々と延ばして眼深かに被ぶつ

た帽子の庇の下からは異様な輝きをもつた小さな眼が時々三等客の乗つた舢舨の方をじろく／＼凝視してゐた。

その隣に坐つた二人の男は昨夜の話の世話方と見えて、二人とも丈の合はないやうな垢染た着物を丸々と着て、毛糸の襟巻を首へ巻いて、腐つたやうな中折帽を被ぶつてゐた。そしてその次には繻帯の男がゐた。打ち踏されたやうに低く腰を落として、腕組をしながら顔を伏せてゐた。

舢舨からも、舷門からも、甲板からも總ての眼が一齊に彼等の上に注がれた。そして小蒸汽はその儘鉛のやうに靜まり返つた海の面に長い波紋を曳きながら漸次と雪に包まれた棧橋の方へ遠のいてゆく。……

代議士は感慨に堪へないやうな顔容をしてその後を見送つてゐたが、やがて呷くやうに、『彼奴等を見て見給へ。一人だつて人間らしい風をした奴はありやしない。みんな樺太の悪政が生んだ犠牲なんだ。』

その瞬間、其處邊に集まつた群衆の間には感激に似た瞬時の沈黙がすうつと走つた。誰ひと

り口をきくものもなく、咳をするものさへなかつた。そしてその次の瞬間には中甲板の方から小さなボーイが、「三番船の艇舟にお乗りの方は下へお降りになつて下さあい。」と、聲高に叫びながら走つて来た。

幹彦全集第壹卷終

大正十一年五月一日印刷

大正十一年五月四日發行

定價金貳圓五拾錢

著作者 長田幹彦

發行者 和田利彦
東京市日本橋區通町三丁目五番地

印刷者 中野鉄太郎
東京市麻布區本村町十八番地

印刷所 東洋印刷株式會社
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所

東京市日本橋區通町三丁目五番地

春陽堂

電話 東京一六一七番
本局西二〇番

幹彦全集第壹卷

著作者之章



類 說 小

近松秋江著	同	同	同	同	同	同	長田幹彦作	久米正雄作	菊池寛作
未	港	夕	殘	若	夜	地	闇	水	毒
	の		る	き	の		こ	の	の
練	唄	潮	花	妻	鳥	獄	光	陰	華
(長短篇集)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(長篇作)
九十五錢 送料十二錢	壹圓五十錢 送料十二錢	壹圓貳拾錢 送料十二錢	壹圓六十錢 送料十二錢	壹圓八十錢 送料十二錢	壹圓八十錢 送料十二錢	貳圓六十錢 送料十二錢	貳圓四十錢 送料十二錢	貳圓五十錢 送料十二錢	壹圓六十錢 送料十二錢

■ 集作傑家名 ■

錢六金各料送 錢五拾八金册各

第十三篇	第十二篇	第十一篇	第十篇	第九篇	第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
油	還	彼	月	五	十	歸	野	白	水	照	其	不
地	魂	女	夜	月	三	去	の	露	彩	葉	面	言
獄	錄	少	美	感	職	夜	來	露	畫	狂	影	語
齊藤綠雨氏著	森 鷗 外氏著	德田秋聲氏著	高山樗牛氏著	正宗白鳥氏著	樋口一葉女史著	國木田獨步氏著	田山花袋氏著	幸田露伴氏著	島崎藤村氏著	泉鏡花氏著	二葉亭四迷氏著	尾崎紅葉氏著

長篇小説

尾崎紅葉作	多	情	多	恨	(同)	送料十二錢
小杉天外作	魔	風	戀	風	(同)	送料十二錢
同	作	己	が	罪	(同)	送料十二錢
菊池幽芳作	乳	姉	妹	春	(同)	送料十二錢
小栗風葉作	青	作	金色	夜	又	終篇
同	作	金色	夜	又	終篇	(上卷)
同	作	金色	夜	又	終篇	(下卷)
長田幹彦作	續	金色	夜	又	(同)	送料十二錢
尾崎紅葉作	金	色	夜	又	(同)	送料十二錢
高山樗牛作	瀧	口	入	道	(長篇作)	送料六十五錢

小説類

同	著	紅	夢	集	(同)	送料十二錢	
同	著	續	雪	の	夜	語	
同	著	雪	の	夜	語	(同)	
長田幹彦著	雪	の	夜	語	(同)	送料十二錢	
菊池寛著	道	理	(同)	(同)	送料十二錢	金貳圓	
里見弴著	善	心	惡	心	(同)	送料十二錢	
菊池寛著	我	鬼	針	(同)	送料十二錢	金貳圓	
同	著	留	針	(同)	送料十二錢	六十五錢	
同	著	櫛	針	(同)	送料十二錢	六十五錢	
同	著	お	三	津	さん	(同)	送料八錢
同	著	返	ら	ぬ	日	(長短篇集)	送料十二錢
鈴木三重吉著	返	ら	ぬ	日	(長短篇集)	送料十二錢	

小 說 書 類

谷崎潤一郎著	呪はれた戯曲	(長短篇集)	金 貳圓 送料十二錢
田山花袋著	残雪	(長篇作)	金 貳圓 送料十二錢
永井荷風著	腕くらべ	(同)	壹圓四拾錢 送料十二錢
鈴木三重吉著	小鳥の巢	(同)	壹圓貳拾錢 送料十二錢
正宗白鳥著	入江のほとり	(同)	壹圓五十錢 送料十二錢
岩野泡鳴著	征服被征服	(長篇集)	壹圓六拾錢 送料十二錢
小川未明著	不幸な戀人	(長短篇集)	壹圓四十錢 送料十二錢
森田草平著	扉	(同)	金 壹圓 送料十二錢
德田秋聲著	出産	(同)	壹圓五十錢 送料十二錢
島崎藤村著	新生	(長篇作)	各壹圓 各送料十二錢

鏡 花 小 說 書

泉鏡花著	遊里集	(長短篇集)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	由縁文庫	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	粧蝶集	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	紅梅集	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	友染集	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	芍薬の歌	(長篇作)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	雨談集	(長短篇集)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	愛草集	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	銀燭集	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
著	鏡花選集	(長篇集)	貳圓八十錢 送料十二錢

詩集歌集

島崎藤村著	藤村詩集	(詩集)	壹圓五十錢 送料十二錢
長塚節著	長塚節歌集	(歌集)	貳圓六十錢 送料十二錢
齋藤義吉著	あらたま	(同)	貳圓四十錢 送料十二錢
花田比露志著	さんげ	(同)	貳圓八十錢 送料十二錢
杉浦翠子著	藤浪	(同)	壹圓六十錢 送料十二錢
中村憲吉著	林泉集	(同)	壹圓六十錢 送料十二錢
吉井勇著	河原蓬	(給人歌集)	壹圓五十錢 送料八錢
島崎藤村著	愛の歌	(詩集)	五圓十錢 送料四錢
森林太郎著	うた日記	(歌集)	壹圓八十錢 送料十二錢
田山花袋著	花袋歌集	(歌集)	六圓十五錢 送料六錢

100
57

終